『ICU比較文化』53〔2021〕
Article accepted Sep. 30, 2020

ICU Comparative Culture
No. 53 [2021], pp. 31-57

「河童」論
――〈産業化と人間性〉をめぐって――

謝　銀萍

はじめに

「河童」は1927年3月に『改造』に発表された作品である。芥川龍之介（1892–1927）が自殺する直前に発表した「河童」は日本社会の全体像を真正面から捉えた作品であり、西洋化がもたらす影響に関する具体的な描写が見られる。「河童」は「芥川龍之介という作家を知る上で、最も重要な作品」(1) であり、芥川文学全体のダイジェスト (2) と言われるほどの重要性が認められている。本稿では西洋化に対する芥川の危機意識が具体的にどのように表現されているのかに焦点を当てたい。

「河童」は「スウィフト「ガリヴァ旅行記」及びサミュエル・バトラア「エレホン」」から材料を得たものとされ、また、「フランスの「ペンギン鳥の島」も暗示を与えているかも知れない」(3) と指摘されている。同時期に発表された作品とはやや異なり、「河童」は以下のようないくつかの特徴を有している。まず、「玄鶴山房」（初出：『中央公論』、1927.1）や「蜃気楼」（初出：『婦人公論』、1927.3）に比べれば、「河童」には社会批判 (4) の性格が目立つことである。次に同じ狂気の語り手を持つ「歯車」（遺稿）の冷徹な個人の独白に対して、「河童」は諧謔でユーモアの表現に満ちている。最後に実際の人間社会の代わりに、河童という架空の動物 (5) の国を舞台にし、様々な身分の河童を登場させることで、包括的に社会の様相を描いている点である。

「河童」は十七章からなり、人間社会から偶然に河童の世界へ入ってしまった〈僕〉の見聞を中心にたくさんのエピソードが織り込まれている。その主題は、学生ラップから芥川の恋愛観、「生活教」の話から芥川の宗教観、詩人トックや

音楽家クラパックの超人クラブの人物像から芥川の芸術観、というように、最終的には芥川へ帰着する読みが「河童」の作品論の代表としてまず挙げられる。あるいは、日本社会と照らし合わせ、河童の出産に示唆される産児制限の政策、音楽の取り締まりに暗示される検閲の問題などが日本社会への批判として考えられることが指摘されている。[6] その他、「河童」における狂気の表現及びその社会的な意味が説かれている。[7] 近年では、「河童」を再評価し、積極的な人生の意味を読み取る試み[8] が主である。「「河童」はあらゆるものに対する、――就中僕自身に対するデグウ（嫌悪）から生まれました」(吉田泰司宛書簡、1927.4.3)[9] という芥川の告白から、社会や人生に対する彼の思惑が込められていることは言うまでもない。しかし、今日でもよく読まれている点を踏まえると、先行研究にみられる芥川個人に焦点を当てる研究の方向性ではなく、現代社会における「河童」の意味を問う必要があるのではないかと考えられる。「河童」には大正期の産業化社会の影がみられる以上、近代都市空間を生きている人間のあり方を考察する試みが一つのテーマとして成り立つと考えられる。このアプローチから読む際に、河童の恋愛物語とか、河童の宗教問題よりは、資本家ゲエル、名を持たない職工や失業者を描く第八章が焦点となる。また、精神病院の患者、第二十三号である〈僕〉がなぜ発狂したか、この点も検討すべき課題である。

以上を踏まえ、本節では〈産業化対人間性〉の観点から、これまで議論の中心にされてこなかった第八章を中心に、近代化による人間のあり方の問題及び現代社会への示唆を明らかにしていきたい。また、第二十三号である〈僕〉の発狂にも着目し、それを誘発する社会的な背景の考察も試みる。これらの議論を通して、「河童」に潜在化している〈産業化対人間性〉の図式を読み解き、そこにまつわる人間のあり方をめぐる諸問題を論じつつ、本作品が提示する現代社会への示唆を試みる。

Ⅰ．パロディとしての「河童」

本論に入る前に、本節ではまず芥川文学における「河童」の位置づけを確か

め、この上で「河童」のパロディ性について論じてみる。

「河童」は他の芥川文芸に通じる特徴がいくつかある。まずは、狂気の語り手である。狂気は芥川及びその文学を解読する上でのキーワードである。周知のように、生母が狂人であることは芥川の生涯に及んで影響を与えている。芥川は自分がいつか母親のように発狂することを恐れつつ、同時に母親に対して深い愛情を抱いている。文学作品の中では、日清戦争を背景とする「奇怪な再会」(初出：『大阪毎日新聞夕刊』、1921.1-2）において、狂気の中国人女性お蓮を登場させ、「影」(初出：『改造』、1920.9）でもドッペルゲンガーの主人公が描写されている。「二つの手紙」（初出：『黒潮』、1917.9）や「歯車」などは狂気の語り手によって語られる作品である。これらの作品に「河童」一篇を加え、狂気は芥川が人生を語る方法論であると言えよう。

また、「河童」は晩年の他の作品に通じる箇所が多い。テクストにおいて哲学者の河童マッグが書いたアフォリズム「阿呆の言葉」がクローズアップされて描かれている。「阿呆の言葉」は明らかに「侏儒の言葉」（遺稿）を踏まえた内容である。例えば、無意識を語る「我々の特色は我々自身の意識を超越するのを常としている。」(10) という「阿呆の言葉」の記述に対して、「侏儒の言葉」では類似する記述の「我我の性格上の特色は、——少とも最も著しい特色は我我の意識を超越している。」(11) が先行し記されている。ほかには、宗教問題への問いかけは「或る阿呆の一生」や「西方の人」に同様のモチーフが見て取れる。

一方、「河童」は他の作品に見られない大きな特徴がある。それはパロディ的な要素が際立っている点にある。この点については、先行研究ではすでに具体的に論じられている。例えば、河童の恋愛に触れる第六章では、雌河童の「誘惑的遁走」について、「河童の恋愛の方法の一つの形であり、人間の恋愛のパロディである」(12) と、近代教という河童の宗教に関する描写第十四章においては、長老の言葉「我々の神は一日のうちにこの世界を造りました」について、「長老が説明する、河童世界の成り立ちのくだりは、『旧約聖書』のパロディである」(13) と指摘されている。これらの他に、出産や家族制度などのスケッチはいずれも日本

社会を連想させないものはないと指摘されている。

ハッチオンは「パロディは一種の模倣ではあるが、パロディ化されたテクストを必ずしも犠牲にしないで、皮肉どんでん返しを特徴とした模倣であるわけだ」(14) と定義した。諧謔や風刺の口調はまさに「河童」の特徴として挙げられる。パロディが「差異をもった反復」である。つまり、パロディの対象とは共通点を持ちつつも、その差異によって諷刺の効果を果たすということであろう。これを「河童」に当てはめてみよう。

> 僕の両側に並んでいる町は少しも銀座通りと違いありません。やはり毛生欅の並木のかげにいろいろの店が日除けを並べ、その又並木に挟まれた道を自動車が何台も走っているのです。(15)

上の引用は河童世界の町風景の部分であり、テクストに提示される「銀座通り」は明らかに日本の町並みを意識してパロディ化した表現である。

また、パロディの成立条件として、作者は「文化的・言語的コードの共有」と、「読者がパロディ化される元のテクストに親しんでいることを前提にする」(16) ことが不可欠である。つまり、共通の約束事しかパロディ化されないのである。「河童」においては、同時代の読者に通じている共通の文化コードがたくさん援用されている。例えば、「近代教」の話に出てくる「聖徒」のニーチェ、トルストイ、ストリンドベリや国木田独歩などの名前が最も良い例であろう。これらの聖徒は芥川の世代の教養をなす世紀末の思想家であり、知識人の間では共通の約束事である。また、「心霊学協会」は当時の西欧から日本に伝わってきて、大正期は流行となっている。ほかにも、「この国のプログラムも大抵は独逸語を並べていました」(17) という発言から、ドイツの国家制度をモデルに建設した日本の存在を想起させずにはおかない。このように、「河童」における河童の国は施設、風習、制度や思想の大半は、現実とは差異を持ちながらも、日本の社会の面影を彷彿とさせるわけである。

実は「河童」のパロディ性について、芥川自身の言葉にも暗示されている。上で引用した吉田泰司宛の書簡より、「河童」は作者芥川を含む人間社会全体へのパロディであると指摘できよう。

Ⅱ．書籍製造工場——創造過程の喪失

さて、「河童」において、産業化対人間性の問題がいかに提起されているのか。以下では宗教、検閲や芸術などに関する描写ではなく、工場や失業者を取り扱う第八章を中心に議論を進めていく。大正期の時代様相を踏まえ、芥川は日本の西洋化をいかにパロディ的に表現していたかを検討してみる。

第八章の内容というと、近代化或いは産業化を代表する空間である書籍製造工場、また機械化による失業への着目が中心となっている。まずは、工場という典型的な工業化空間がいかに捉えられているかを分析したい。物語は〈僕〉が資本家ゲエルの斡旋で、河童国でいろいろな工場を見学することから始まる。そこで、「殊に僕に面白かつたのは書籍製造会社の工場」である。

> （前略）そのいろいろの工場の中でも殊に僕に面白かつたのは書籍製造会社の工場です。僕は年の若い河童の技師とこの工場の中へはいり、水力電気を動力にした、大きい機械を眺めた時、今更のように河童の国の機械工業の進歩に驚嘆しました。何でもそこでは一年間に七百万部の本を製造するそうです。が、僕を驚かしたのは本の部数ではありません。それだけの本を製造するのに少しも手数のかからないことです。何しろこの国では本を造るのに唯機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから。それ等の原料は機械の中へはいると、殆ど五分とたたないうちに菊版、四六版、菊半截版などの無数の本になって出て来るのです。僕は瀑のように流れ落ちるいろいろの本を眺めながら、反り身になった河童の技師にその灰色の粉末は何と云うものかと尋ねて見ました。すると技師は黒光りに光った機械の前に佇んだま

ま、つまらなそうにこう返事をしました。
「これですか？これは驢馬の脳髄ですよ。ええ、一度乾燥させてから、ざっと粉末にしただけのものです。時価は一噸二三銭ですがね。」
勿論こう云う工業上の奇蹟は書籍製造会社にばかり起っている訣ではありません。絵画製造会社にも、音楽製造会社にも、同じように起っているのです。［下線は筆者によるもの。以下同］(18)

これは〈僕〉が見てきた工場内の光景である。それは現代産業化の生き生きとした描写である。長い描写ではないが、「水力電気」、「大きな機械」や「技師」(19)の近代化の代名詞、また、「七百万」、「五分とたたないうちに」、「無数」などの数字表現を通して、目まぐるしいスピード感を表現し、産業化に邁進する日本社会の雰囲気がありありと伝わってくると言えよう。「一年間七百万部の本を製造する」ことは、昭和初期の円本ブームを暗示していると説かれている。(20) ただ、「瀑のように流れ落ちるいろいろの本」を加えて考えると、効率的な近代化社会が投影されていると解釈しても良いであろう。

また、ここで留意したいのは技師と機械の対照である。工場の全体を見渡すと、機械に比べて人間を表象する河童の技師の存在感が非常に薄いと言わざるをえない。とりわけ、機械の高速運動に表れるある種の近代的な「野蛮の」力に対して、技師の「つまらなそう」な態度に精力が欠けていることが鮮明である。このように、書物の生産にかける人の労力は甚だ微小なものであり、その反面、機械の力は印象深くインパクトが強い。これまで社会の発展を動かしてきた人間の労力というものが徐々に機械に代替される様子が示唆されていると考えられる。また、この対照により、人間の労力に取って代わる機械の暴力性が示唆されている。

しかし、なぜ〈僕〉は他の工場でなく、書籍の製造工場に強い関心を持っていたのか。産業化の進歩を思わせる以外に、何かもっと重要な理由があるはずである。この「工業上の奇跡」は書籍だけでなく、絵画や音楽にも起きていることか

ら、書籍の製造工程にこの点の考察のヒントがある。つまり、〈僕〉は芸術の生産過程に興味を持っているだろうと考えられる。「河童」で芥川が提示する印刷の技術の進歩は最も近代化の道程を代表する一例である。「大正三年から、印刷業界はオフセットを導入し、それによって、高速度大量印刷が行われるようになった」(21)。河童の国では書物の印刷がどのように行われるかを確かめよう。「この国では本を造るのに唯機械の漏斗形の口へ紙とインクと灰色をした粉末とを入れるだけなのですから」という過程の描写がある。ここから、河童の国では「書籍（さらには絵画や音楽）という芸術作品までが、この国では一般の原料加工型の製造業と同じレベルで製造されている」(同上）ことが分かる。「唯」と「だけ」とを連用することにより、「書籍の中身につながるであろう唯一の材料」の「灰色をした粉末」の存在が強調されている。それは「驢馬の脳髄」だと後に説明される。西洋の文脈では驢馬の脳髄は「バカ」の隠喩としてよく使われる表現である。ここで、書物の中身を「驢馬の脳髄」だと喩えるのは、河童の国の奇跡を引き起こす機械への軽蔑なのではないであろうか。河童の国では機械によって製造される書物、音楽や絵画の芸術の価値は「時価一トン二三銭」に過ぎない原料の値段から分かるように、大した価値がないことがわかる。

また、機械によって生産できる芸術に関する「奇跡」が、また人間と機械の関係性を表している。その生産過程に人間の知が機械の「知」に取って代わられるという恐ろしいことが起きている。本来芸術というものが、「芸術家の想像力（内部世界の再構成力）の実体で」(22) あるからである。

> 芸術家は、「創造的想像力」ないし「芸術的空想」をふくらませて、「世界という大きなドラマ」のうちから、典型的なドラマをえらびだし、それを模倣再現して、フィクションとしての「ドラマの世界」を、したがってそれを構成するいろいろの「典型」ないし「諸典型」を創造的に想像し、空想によってつくるのである。(23)

芸術の生産過程において、創造力と想像力がいかに大いなる役割を果たしているかを示す文である。このように、書物、音楽や絵画などの芸術は人間の創造的想像力による「意識的・計画的に行われる営み」のはずである。それに対して、河童の国における芸術の製造過程は原料加工型に因んで、人間の創造力の働きが問われる。あるいは、驢馬の脳髄をもって人間の思考に喩えていると理解してもいいが、機械の効率性に対置され、人間の愚かさが皮肉の対象になっている。とりわけ、インクと紙と驢馬の脳髄だけという近代的な芸術創出には機械の欲望性と暴力性が暗示されている。同時に、人間の知恵の想像力及び創造力が機械の進歩によって代替されることへの警戒心が十分に読み取れるのであろう。

河童の国では、現代工場の発展により、芸術の内実が次第に変質してしまう危機が迫ってくる。場合によっては機械化が人間のあり方の根本を変容させつつあるのではないかと懸念せざるを得ない。機械は人間の労力だけでなく、頭脳すら代替できるという産業化の暴力性が示唆されている。

Ⅲ．預言書としての「河童」――人工知能の可能性

前節までで検討した書籍製造工場の描写に暗示される機械と人間との関わりやそのあり方は、今日の社会へ繋がるものがあると考えられる。人間の創造力の代わりに、驢馬の頭脳を入れるだけで、書物が出来上がるという過程に象徴される機械の「知的」な存在は、昨今新聞やニュース等で騒がれている人工知能を思わせてならない。

人間が機械による脅迫を案じている「河童」は、1927年に執筆された。「河童」はあくまで架空の世界であり、当時は「明治・大正期の未来予測小説や科学小説」(24) という評しかされていない。しかし、「河童」の発表から百年もたたないうちに、「河童」で示唆される機械と人間の関係が現実味を帯びてきた。人間から独立した人格を持ち、人間の創造力に勝る「知」を持つ人工知能が完成しつつあるのである。それどころか、一人の人間として戸籍登録をされている人工知能すら現れている。この点について、2017年10月25日にサウジアラビアが歴史

を作った。人工知能の「ソフィア」に市民権を与えることで、世界初のロボット人間が生まれたのである。ソフィアは人間のように、様々な繊細な表情を作ることができる。その開発者は将来的には人間のような能力や生きている感覚を完全に実現することを目指し、ソフィアの研究を進めると報道されている。倫理的に、「ソフィア」をどのようにみるべきかはともかく、2016年にロボットの「ソフィア」は「人類を滅ぼさせます」と発言したことがある。(25)「ソフィア」の返事は、機械と人間の立場を変化させる可能性を考えさせる。最もこのような「ソフィア」の住民権取得は、人間と機械の歴史を変える一歩と位置づけられる。これまでの機械と人間の関係が完全に転倒され、元来の主従関係から対等関係へと変わっていくのである。彼女の誕生はいうまでもなく、人間の知恵並びに最先端の科学技術の発達を証明したものであるが、このような科学技術や人工知能が人間のあり方に及ぼす影響を無視することはできない。その暴力性が現実のものとなる前に、改めてその正当性を考える必要性がある。「河童」に戻るが、書籍工場の生産機械は人間の想像力を借りずに芸術などを生産でき、このような「知」的な一面と考えられる。この意味においては、「河童」における書籍などの芸術を原料加工のように生産できる機械は人工知能のひな形としても考察することができる。

機械が素早く運転し、無数の書籍を製造している工場を見回すと、技工以外には河童の姿しか見ることができない。大きな機械と小さな人間、動いている機械の精力と、「つまらなさそう」な河童の姿という対照は、チャールズ・チャップリンの『モダンタイムス』のシーンを想起させる。アメリカの機械文明を風刺する『モダンタイムス』では、機械と職工の対比が端的に描写される。産業の機械化がもたらした影響である、人間が機械の運転に支配されるという関係が繰り返される。機械が人間のあり方へもたらした影響は、主人公チャーリーおよび技師が機械に飲み込まれる二つのシーンからもうかがえる。このように、産業革命の下で人間と機械の本末転倒な姿が強調される。『モダンタイムス』によりユーモアに描写される機械と人間の関係性がすでに「河童」の書籍工場に内包されてい

ると考察できる。

河童の国では、〈僕〉は原料加工のように生産される書籍などの芸術生産を見学し、それを記している。他の作品より、「河童」における書籍工場のシーンは最も当時の日本の産業化の風潮と結びついていると言わなければならない。そこには、急速な近代化を賞賛する気持ちだけでなく、この変化の底に流れる危機感への警戒が示唆されている。人間の労力と創造力を兼ね揃え、芸術すら生産できる機械の「知」的な存在の台頭に、人間の主体が脅かされつつあることがうかがえる。1927年では、このような事態は空想であったが、人工知能の発達が著しい今日では「ソフィア」の存在を看過することはできない。このような意味において、「河童」には予言書的な側面があり、文学的な表現を通した科学進歩への警鐘としても考察できる。

Ⅳ．商品化される身体

書籍製造会社にある大きな機械が印象的であったが、このように大量の機械投入による効率的な生産の反面で職工の失業が問題となる。「河童」の第八章の後半では、河童の失業の描写がなされる。この話題は〈僕〉と資本家ゲエルらが交わしたいくつかの話の一つでもある。以下、河童の失業の問題及びその本質について考察したい。

河童の国では「平均一カ月に七八百種の機械が新案され、何でもずんずん人手を待たずに大量生産が行われる」ということである。この文からそのパロディの原型である日本社会の産業化の実態を想像するに難くない。(26) また、「毎朝新聞を読んでいても、一度も罷業と云う字に出会いません」(27) という現象に、〈僕〉は関心を寄せている。そこで、硝子会社社長のゲエルにその現象について聞いたところ、職工の失業問題に備え「職工屠殺法」という法律の存在が知らされる。つまり、失業した労働者を法的に処置し、食料として食べてしまうことである。(28) ここに、西洋文化の暴力性が強烈に暗示されている。法的な規定により「食人」を合理化しようとする発想は明らかに西洋から流れ込んできた合理主義

への皮肉であろう。

これらの解雇された職工が商品化されて市場に流通するようになる。「今月は丁度六万四千七百六十九の職工が解雇されましたから、それだけ肉の値段も下がった訳ですよ」と語られるように、機械の導入で失業した労働者の惨めな境地が描かれている。これらの職工の身において、ある種の身分の反転が起きている。それは商品を作る側から商品化される側になったという反転である。この現象の出現の原因はむろん産業社会の機械化の推進に辿れる。このように、「職工屠殺法」には人間と機械の対立図が提示され、機械の暴力性および人間の主体性の疎外が問題化している。「河童」では切実な労働者の階層の話において、産業化発展における負の側面が暴かれていると言えよう。

むろん、「職工屠殺法」は芥川が河童という架空の世界を借りて、想像を馳せた大げさな描写である。現実的にはこのような状況で人肉食はあり得ないが、そこに示唆されている身体の商品化の問題は1920年代の日本あるいは他の産業化社会ではありふれた景色であったろう。テクストにある「あなたの国でも第四階級の娘たちは売笑婦になっているではありませんか？職工の肉を食うことなどに憤慨したりするのは感傷主義ですよ」と示唆されるように、身体の商品化の問題は現実の社会では別の形として現れてくる。第四階級は「プロレタリア・労働者階級・無産階級のこと」(29) と言い換えられる。また、1920年代の日本における女性の境遇について、小山は以下のように指摘している。

> 第一次世界大戦後の金融恐慌（1920年）と世界恐慌（1929年）の10年間は現代日本大衆社会の基礎が形成された時期である。だが、それは都市型社会における消費生活スタイル、余暇時間の娯楽生活の基礎であり、長い「不況期」に対するフラストレーション、ストレスに対する「解決方法」を見出せたわけではなかった。都市部での長引き不況で昭和5年には失業者は150万人、年間自殺者が13942人に達し、農村では昭和4（1929）年の「豊作飢饉」、昭和6（1931）年の「冷害凶作」によって、

近接する工場への出稼ぎ、都市部への労働者の転出、なかでも女性労働者の転出による「身売り」が多発し、15～35歳までの1400万人の女性人口のうち、東京では6000人、全国では5万人もの女性が公娼とならざるを得なかった。(30)

貧苦な生活を乗り越えていくために、体を売る商売をする女性はすでに「南京の基督」に見られるが、当時の日本では資本発展の結果、失業問題と共に顕在化した女性の身体売買は一つの社会問題だと言える。日本の「第四階級の娘たちの」商売と河童における人肉食に共通しているのは、身体の商品化及び労働者への搾取にあると考えられるが、両者には異なる点もあることに注意したい。河童の国では、機械による失業した人々の主体性が完全に奪われ、失業すれば生きる資格も失われるという徹底性が指摘できる。一方、身体の売買は、生きていくための手段とされている。このような対比を通して、一層河童のような高度な産業化社会の残忍さが浮き彫りにされるのではなかろうか。「河童」に日本社会にも人肉食の現象があると指摘された〈僕〉は「星明かりも見えない荒れ模様の夜」のように、暗い気持ちになり、言い返しもできずに残酷な現実に閉口せざるをえなくなった。

「河童」の国における失業した職工への法的な処置は、明らかに近代合理主義への風刺である。職工の商品化した身体から、機械文明がもたらした人間の主体性喪失の問題もここに見て取れる。河童の国という架空の舞台を通して、芥川はやや誇張した世界観において産業化と人間性の問題を見つめていたと言えよう。

Ⅴ．河童世界の刑罰の内実

書籍製造工場や職工屠殺法の他に、第十二章で描かれる河童の国における刑罰方法にも近代化の底に流れる暴力性の問題が内包されていると考えられる。

物語は〈僕〉が河童の国で万年筆を盗まれたことから始まる。犯人の河童グルックは子供のおもちゃにしようと万年筆を盗んだが、捕まえる時点で彼の子供

が亡くなり、河童の刑法千二百八十五条により、無罪だと判定されている。〈僕〉は訝って、哲学者マッグの家に行って、そこに集まっている裁判官のペップに話を聞く。刑法千二百八十五条の内容とは「『如何なる犯罪を行ひたりと雖も、該犯罪を行はしめたる事情の消失したる後は該犯罪者を処罰することを得ず』」(31)である。グルックは一週間前に子供を亡くしたため、「嘗ては親だったのですが、今はもう親ではありませんから、犯罪も自然と消滅するのです」と述べる。「親だった河童も親である河童も同一に見るのこそ不合理」(32)のため、河童の国の処置は合理的だと主張される。そして、「日本の法律では同一に見ることになっているのですね。それはどうも我々には滑稽です。」(33)という日本の法的な社会が疑問化されている。

いうまでもなく、河童の国における刑罰の処置は現実の社会ではあり得ないことである。この処置を認めることは法治社会への挑発であるとも言えよう。この刑罰の発想について、先行研究ではいずれも芥川自身の経験と関わっていると説かれている。(34) 確かに、芥川龍之介の遺書にあった「ぼんやりとした不安」を振り返ってみる際に、彼の義兄の放火罪やこの義兄の自殺という家族から受けた精神的な苦悩から解放されたい気持ちを、河童の刑罰処置の展開から垣間みることが可能であろう。しかし、上記で議論されている「職工屠殺法」を踏まえると、芥川龍之介の個人的な事情から距離を置き、より普遍的な解釈ができるのではないか。例えば、〈僕〉の万年筆を盗んだグルックの境地を視野に入れると、彼のその後の運命が案じられる。なぜなら、グルックは失業したからである。巡査に職業を聞かれた際、グルックは「つい二三日前までは郵便配達夫をしていました」(35)と答えている。つまり、グルックは今失業者の一人になってしまったのである。河童の国にある「職工屠殺法」によると、失業した労働者は食料にされ市場流通にだされ食べられてしまう。グルックの盗窃罪は刑法により免れたのだが、彼の殺される可能性がなお潜んでいることは否定できない。このように考えれば、この物語を通して資本社会にある偽善が暴かれていると分析できる。恐らくグルックにはこの先商品化される運命が用意されている。このように、刑法に

規定される刑罰の処置は、合理的な存在でなく、却って裁判官ペップらへの風刺として位置づけられる。

また、グルックと資本家ゲエルの両者の対照からも産業化社会の非合理的な一面がうかがえる。ゲエルは硝子会社の社長であり、「資本家の中の資本家」であるのに対して、グルックは失業者に過ぎない。「河童の中で一番大きい腹をもっている」という描写が示すように、ゲエルは富に恵まれている。彼は「いつもの純金の匙に珈琲の茶碗をかきまはし」て、「荔枝に似た細君や胡瓜に似た子供を左右にしながら、安楽椅子に坐っている」(36) ように、安らかに日々を過ごしている。一方、グルックの「蚊のように痩せた」体格から、その懐の寒さが想像できよう。彼は「わたしの万年筆を盗ん」で、「子供の玩具にしよう」とするほどの窮地にある。また社会的地位として、ゲエルは河童国の政党を支配するほどの支配者で、グルックはゲエルらの権力により支配される立場にある。医者、音楽家、哲学者などの河童とは異なり、グルックは名前が示されるが、数多くの無名な職工の失業者として位置づけることができる。彼と資本家ゲエルの端的な対照により、一層その惨めな存在が強調されるように見える。このような労働者と資本家の格差がある以上、労働者運動の勃発が暗示されているのではないだろうか。(37)

第二十三号は精神病院を訪れる「僕」を相手に、「出て行け！この悪党めが！貴様も莫迦な、嫉妬深い、猥褻な、図々しい、うぬ惚れきった残酷な、虫の善い動物なんだろう。出て行け！この悪党めが！」(38) と怒鳴っている。この怒りには、これまで論じてきたように、近代合理主義の偽善的な一面及びそれに流されている人間への嫌悪が示されているのではないだろうか。

Ⅵ. 語り手の発狂について

「河童」で語られる物語はつまるところ「ある精神病院の患者である」〈僕〉の思考に統括されるものである。フーコーによれば、狂気は「客体化を行う最初の形態となり、それによって人間は、自分自身を客観的に捉えることができる」(39)

ということである。これを踏まえれば、「河童」では狂気は人間社会を客体化する方法論と考えられる。本稿の締めくくりとして、第二十三号[40]の〈僕〉がなぜ狂気に陥ったのかに焦点を当て、狂気の内実と社会の産業化の関わりについて考察したい。

まずは、第二十三号の身分について確認してみよう。テクストの断片からいくつか情報を手に入れることができる。「彼はもう三十を越しているであろう」から、〈僕〉は三十代であることが示唆されている。〈僕〉は「前に穂高山は勿論、槍ヶ岳にも登っていました」[41]のである。今回は上高地の温泉宿から出発し、「朝霧の下りた梓川の谷を案内者もつれず」[42]（同上）遡って穂高山へ登ろうとしている。登山の準備として、円い腕時計をつけ、リュックサックに「コオンド・ビイフの缶」を入れ、登山服や毛布などを持っているという万全な準備をしている。これらの小説の要素から、〈僕〉は登山のベテランであることが分かるのだ。[43]加えて、「明治大正期は所得格差が大きく、教員、国家公務員や銀行員らの安定的な所得を得る人以外に、登山どころではない人が圧倒的に多かった」[44]ことから、第二十三号の〈僕〉は経済的にはかなり余裕があるに間違いない。一方、ストリンドベリやニーチェといった西洋の思想家から日本の国木田独歩などの東洋の知識人にまで詳しいことから、〈僕〉は博学であると推測できよう。河童トックと交わした会話において、〈僕〉は自称社会主義者[45]である。このように、第二十三号は裕福で、教養のある知的な知識人であると見てとれる。とりわけ、レジャーとしての登山は近代以降のことであり、西洋から受けた影響によることに留意しなければならない。

ところで、「河童」を語る時点で〈僕〉は発狂し、精神病院に監禁されている。その理由について「河童の国から帰って来た後、丁度一年ほどたった時、僕は或事業の失敗した為に……」[46]と第十七章で一言しか触れられていない。だが、その行間から「或事業の失敗し」、失業になったために、発狂してしまっただろうと推測できよう。ある事業とはどんなことかはさておき、〈僕〉のような発狂の事例が当時の日本にないかどうか、新聞記事を通して見てみよう。1920

年代の『朝日新聞』を広げると、産業化社会における狂気の多発が目に留まる。「日華電気の重役自殺　事業の失敗に発狂」（1924.7.15）、「模範青年の縊死　事業に失敗して」（1927.2.19）や「銀行頭取の自殺　事業の失敗か」（1927.6.18）が掲載されている。この時期において、〈僕〉のような事業に投身し失敗して精神的に異常が出ることは異例ではないことが分かる。〈僕〉のような人間が新しい事業に乗り出した理由は、むろん近代化の発展に魅了されていたからであろう。また、この他には起業の失敗か、会社の倒産かといったような理由が考えられるが、いずれにしても〈僕〉は財産を尽くし、社会地位が危うくなってしまった。要するに、〈僕〉は産業化社会の犠牲者である。

そこで、〈僕〉が思いついた行動は「また河童の国へ帰りたくなった」である。注意したいのは、行きたい等でなく、「帰りたくなった」という表現に、能動的な主観的な意志が確かに読み取れることである。問題は〈僕〉がなぜ河童の国へ「帰りたくなった」かにある。ここでは河童の国における〈僕〉の立場と、現実の社会における〈僕〉のありようとの比較を通して考察したい。河童の国に行けば、〈僕〉は「特別保護住民」として、衣食住が保証されている。つまり、「人間であるという特権の為に働かずに食っていられる」わけである。そして、十分な自由が与えられている。〈僕〉は「労働者から資本家、芸術家から裁判官といったあらゆる階層の人々と親しく話を交わすことができる」(47) のである。漁師のチャック、学生のラップ、哲学者のマック、資本家のゲエルなどと、不自由なく交遊することができたのである。一方、人間世界では、〈僕〉は「或事業に失敗した」ために、経済的に困っているのは想像に難くない。精神を病む者とされ、「人間の市民的、法的形態を認めるものとしての自由を使用する術を失った者」(48) にされて精神病院に監禁されている。自由の喪失は人間の主体性の喪失に等しいのである。してみれば、〈僕〉が再び河童の国へ帰りたい理由は、人間世界における自分の権益を取り戻そうとする下心ではないかと推測できる。

「「僕」は、自分が人間であり、河童たちと異なるという意識を最後まで捨てていない」(49) と説かれているが、河童の国における〈僕〉の変化に注意すると、知

らず知らずに人間性を捨てて河童へ動物化していく側面が見られる。〈僕〉は河童の日常の言葉を覚え、彼らの風俗や習慣を吸収し始める。時には、ゲエルらと同じように、職工の肉まで食べる。このように、人間であることを時に忘れ、意識的に動物性を目覚めさせる描写がある。「河童」で芥川は明確に河童のことを動物と定義している。従って、〈僕〉は河童の国へ「帰りたい」と言い出した瞬間、人間から意図的に動物へ転換するという図式が内包されていると指摘できよう。河童の国では自由が確実に確保されているとは言え、人間世界における人間としての主体性を保つことができるかが彼の安易と言える帰郷への思慕に潜む大きな疑問である。

さらに、〈僕〉が河童の国を去った経緯を確かめよう。〈僕〉は最初に偶然の出来事で河童の国へ侵入したが、そこでしばらく暮らし、友人の詩人トックの自殺を経験してから、憂鬱になり、自ら人間の社会へ戻ると決めつけた。

> 「唯わたしは前以て言うがね。出て行って後悔しないように。」
> 「大丈夫です。僕は後悔などはしません。」
> 僕はこう返事をするが早いか、もう綱梯子を攀じ登っていました。年をとった河童の頭の皿を遥か下に眺めながら。(50)

河童の国から離れることは〈僕〉の意志による決定である。しかし、今度は「ある事業に失敗し」てから、また河童の国へ帰りたいと主張しだした。「人間社会から河童の国へ、河童の国から人間社会へ、さらに河童の国へ」という循環のルートが確認できる。ただし、ここでは、〈僕〉の無意識的行動と意識的な行動の分別がある。この循環は『モダンタイムス』を彷彿させる。『モダンタイムス』で失業したチャーリーは一回目に刑務所に入れられてから、今まで困っていた食住などの生存の基本をめぐる諸問題が解決されたから、解放される際に刑務所から出たくなかった。そこで、彼は意識的に罪を犯し再び監禁される。このような極端な行為は、「河童」の〈僕〉に相通じる部分があるのではなかろうか。

つまり、産業化社会の発展に追われている人間のありようをここに垣間みることができよう。〈僕〉は人間社会で精神病院に監禁され、人間の主体性が危ぶまれている。が、河童の国に帰ることは、意識的に人間性を放棄することに等しい。この前後の変化を迫ったのは、ただ「ある事業の失敗」という現実の出来事にある。つまり、〈僕〉の意志転換の底には、近代社会の産業化発展に追い詰められている生が直面した問題を指摘できる。精神病院を訪れる「僕」を相手に、第二十三号の発狂は、まさしく産業化と人間性という図式に吸収され、近代化社会への問いかけであり、人間のあり方への思索を促す意味を持つと考えられる。

終わりに

本稿では芥川の晩年作「河童」を取り上げ、産業化社会を彷彿とさせる機械工場を描写する第八章及び語り手の発狂を中心に考察を行った。上に論じてきたように、「河童」は日本の近代化社会に対する芥川の姿勢を内包したのである。

先行研究で指摘されたように、「河童」は社会批判をしたり、芥川自身の心境を反映したり、あるいは、希望に満ちている作品だと説かれてきたが、その現代的な意味は、今の産業化社会に通用しているところに見出すことができ、現代に向けて様々な示唆がなおも提示されていると強調したい。「明治期後半の産業革命を経て近代化が進む日本の産業構造が急転換を遂げ、第二・第三次産業の就業人口が大幅に増大した」(51) ことは「河童」の背景である。このような産業の機械化に伴い、我々人間のあり方がそれなりの影響を受けせざるを得ないことは事実である。

機械文明の推進という大きな背景の下で、書籍製造工場から読み取れる人間の創造力への脅威、「職工屠殺法」に内包される商品化される身体、刑罰法に見る近代合理的な社会の偽善、そして、〈僕〉の発狂の内実に当たる人間の主体性の喪失などは、いずれも産業社会における人間のあり方をめぐる切実な問題が「河童」を通して読み取れることを示している。産業の機械化がもたらす影響はもちろんよい面もあれば、「河童」に内包されているように、負の面も存在している

ことに注意を払わなければならない。現代社会では、産業革命、機械化がますます進行の一途を辿っている。この意味においては、1920年代を背景とする「河童」は現代人に警告を与え、特に現代社会における機械と人間との関係性についての再考を促している作品と言えよう。

注

(1) 宮坂編（1999）、p.125

(2) 羽鳥、布川監修、p.6

(3) 吉田（1981）、pp.112-113

(4) 1927年8月の『新潮』（新潮合評、1927.4）で林房雄は「社会のあらゆる表象を作品に取り入れて批判を投げる諷刺文学が社会主義作家に依って先駆されずに芥川氏に依って先駆された——それが面白いと言うのです。もちろん僕等がこういうものを書く場合には違った表現形式をとるであろうし、批判の現れも違うであろうけれども、こういう社会の全領域にわたって縦横に筆を振う作品は、先ず社会的作家によって作られるべきだったと思う。その口火を芥川氏に依って切られたというのは、非常な興味と圧迫を感ずる」（山本編、pp.310-311）と論じている。「河童」は他の芥川作品に比べると確かに、社会諷刺の特徴が直接的に読み取れる。

一方、「河童」の中国語訳は1927年の『小説月報』（18－9）に掲載されて以来、中国の文人に注目されていた。芥川の自殺を弔う論説においては、「河童」に触れる文人が三人いる。それぞれを以下のように紹介しておく。まずは鄭心南「芥川龍之介」において、「「河童」という作品は、現代社会の芸術、哲学、法律、倫理、習慣などへの風刺が余す所なく描かれている。諧謔にしては古臭くない。滑稽にしては下品ではない。『鏡花縁』や『広陵潮』と比べれば、芥川氏の価値の所在が分かる。［中略］尤も「河童」は自殺を決した後の傑作である。そこでは現代社会に対するすべての不平が告白され、胸の中に積み重なった苦悶が解消された。恐らくその詩人トックの自殺は彼自身の写実であろう。」（［ ］は筆者による補注を示す。以下同）と中国の古典と比較しながら、「河童」の価値を認めている。鄭伯奇「芥川龍之介与有島武郎——文人自殺心理的一考察」では、「三四ヶ月前に『改造』に掲載した寓言小説「河童」では、彼は資本主義の社会を徹底的に罵ったのである…取り分け「河童」一篇に驚いた。芸術至上主義者たる彼は、階級文学に超然的態度を抱く彼は、いきなりこのような熱烈かつ透徹な文字で社会思想を描いたからである。」と「河童」の芸術的な特徴に感心している。騰固「聴説芥川龍之介自殺了」では「去年の冬、私は『改造』に掲載された「河童」を読んでみた。彼は軽妙な筆致で少しずつ日本社会の醜悪を暴きつくした。なんて見事なことだろう！彼は伝説の人物として、帝国主義者との併存を望まずに、帝国主義者の素顔が凶悪になるほど、彼の自殺する信念が高まっていくのではないか。」と「河童」の社会批判の思想を指摘している。総じて言えば、「河童」の社会批判に共感している中国文人の姿が確認できるのであろう。

(5) 「河童」の第三章では、芥川は河童のことを動物と明言しているため、本稿では一

律河童を動物と見なす。他の見方としては、妖怪扱いされるのもあるが、なぜ芥川が河童を動物と認識しているのかについては今後の課題にしたい。

(6) 「あらゆるもの、ことに彼自身に対する「デグウ（嫌悪）から生まれた」と彼は書簡の一つで書いているが、この「河童」の国の問題はすべて彼自身に痛切なものばかりだった。遺伝、家族制度、恋愛、失業、ジアナリズム、戦争、芸術、法律、自殺、宗教、死後の名声その他は何れもすでに死を覚悟した彼自身にとって最も関心のある事実であり、戯画化された画面の中に紅血をしたたらせようとした意図を知り得る。それは昭和初期の社会の一縮図であったに相違ないが、社会批判である上で、自己批判だったのである」（吉田、1981、p.116）と言われるように、「河童」は当時の日本社会と芥川内面の両方を垣間見る手がかりとなる。

(7) 陳玫君（2011）は、「河童」に登場してきた狂人の描写を取り上げ、テクストにおける狂気の機能について論じていたが、〈僕〉がなぜ発狂してしまったかについては言及がない。また、酒井英行は「狂人」の「僕」が「狂人」と設定されることによって、「本来あり得ない話」（酒井、2007、p.255）として受け取られるべき「河童の国」の話が、「彼にとっての真実」という意味で、逆にリアリティを持つということを述べている。関口安義は当時の検閲制度への配慮で、「物語が河童の世界、しかもそれが狂人の妄想ならば、検閲という厄介な壁も超えられるのではないかというしたたかな計算が、作者にあった」（関口、2009、p.39）ためだと述べている。

(8) 足立直子は「〈信〉への憧憬として、存在の連帯への希求として反転する可能性」（足立、p.152）を読み取った。著作としては、羽鳥徹哉・布川純子監修（2007）では当時の日本社会の出来事などを踏まえ、章ごとに詳細な注釈が施されている。「河童」を研究する上には重要な参考資料として留意されたい。

(9) 芥川、1997.8、p.291

(10) 芥川、1996.12、p.140

(11) 同上、p.80

(12) 羽鳥、布川監修、p.124

(13) 羽鳥、布川監修、p.323

(14) ハッチオン、p.16

(15) 芥川、1996.12、p.106

(16) ハッチオン、p.216

(17) 芥川、1996.12、p.120

(18) 同上、pp.123-124

(19) 近代化を代表する工場や大きな機械の登場するシーンというと、チャールズ・チャップリン（1889–1977）の『モダンタイムス』（1936）がすぐ連想される。『モダンタイムス』は昭和恐慌後の西洋の金融危機を背景とするもので、そこでは近代化効率社会あるいはモダン社会を象徴する時計、工場、自動化マシンなどの道具が使われ、機械化による人間の変化、あるいは機械化のマイナス面を切実に記録した無声映画である。

（20） 羽鳥、布川監修、p.149

（21） 同上、p.151

（22） 吉本、p.554。また、「芸術活動の相当量——あるいはほとんどといえるかも知れない——「河童」ではインクと紙と驢馬の頭脳を機械に入れるだけで、書物が出来上がるという過程に背景化される機械の「知的」な機能は、二十一世紀で別の形式へ進化していると言わざるを得ない。が想像力の活動によっている」（p.73）と山敷和男は述べている。

（23） 芝田編、p.22

（24） 羽鳥、布川監修、p.151

（25） 報道（2016.8.17)によると「He also jokingly asked her, “Do you want to destroy humans?… Please say no.” He quickly turned red when the machine responded without hesitation, “OK. I will destroy humans.”」とあり、ロボットソフィアは躊躇せずに「人類を滅ぼさせます」と答えている。参考：
https://globalnews.ca/news/2888337/meet-sophia-the-human-like-robot-that-wants-to-be-your-friend-and-destroy-humans/（最終閲覧日：2019.8.30）.

（26） 1920年代の産業化を推進する中、様々な機械が利用されている。例えば、採炭の機械、電話、置き時計、セメント工事の新機械、鉄鋼石炭機械などの機械が各分野で活用されている。また、日本国内における機械の生産も重要視され、試行錯誤が行われている。例えば、「造船所が電気機械製作」（『朝日新聞』、1925.3.5）という記事で、造船界が窮状を乗り越えるために、川崎造船所や三菱造船所が電気機械部を新設し、電気モーターを始めるなど、工業会社の製造に参入し、あらゆる工業および諸機械を製作する方法を学んでいる。また、他の製造会社との間で激しい競いも指摘されている。このように、日本社会の機械化風潮が高まっていることが想像できよう。

（27） 1920年代の日本では、失業の問題は産業化の推進により深刻な問題となる。当時の紙面では「労働者町で機械工の示威　三千名横綱町に集合　失業防止と過激法案反対」（『朝日新聞』、1923.2.10）、「川を隔て本所の示威　職を与へよ飯を与へよと機械工の真剣の声」（『朝日新聞』、1923.2.12）、「突然の解雇に星製薬職工驚く　会社が人手いらずの機械を買い入れたため　職員とも六百十名が」（『朝日新聞』、1925.7.24）などの記事があり、機械化による失業の問題が注目されている。

（28） 職工屠殺法についてだが、スウイフトの「貧困児処理法捷径」から着想を得たと指摘される。また「食料問題が重大化していることの影響、オートメーション化していく産業の中における資本家の労働者に対する姿勢への風刺、といったものも」（羽鳥、布川監修、pp.151-152）含まれていると説かれている。

（29） 同上、p.154

（30） 小山、p.118

（31） 芥川、1996.12、p.145

（32） 同上

（33） 同上

（34） 例えば、吉田精一は「執行猶予中、放火罪の嫌疑をうけたまま自殺してしまった彼の義兄を、念頭に置いて云っているに違いない」（吉田、1979、p.225）と述べている。

（35） 同上、p.143

（36） 同上、p.123

（37） ゲエルとグルックの対照を資本家と労働者の対立として捉えるならば、プロレタリア運動の勃発は起りうるものとして物語を通じて提起されていると考えられる。これは1920年代後半の日本の社会主義運動や労働者運動と対応している。ただし、河童の国ではこの現象を防ぐために「職工屠殺法」を作ったのではないかと推測できる。このように、「河童」という架空の舞台に託し、芥川は機械化される文明の発展の末路を描いたと言えよう。

（38） 同上、p.103

（39） フーコー、p.481

（40） 様々な登場人物が出てくる中、なぜ〈僕〉が名前を持たず第二十三号でなければならないのか。ここでは一つの仮説を立ててみたい。1920年代の日本社会を見渡すと、二十三に関わっている大事件が一つあった。それは1923年の関東大震災である。芥川個人に至っては「大震雑記」（初出：『中央公論』、1923.10）などの十数編の作品の中で当時の様子を描いている。この大震災を節目に、日本では近代的な市民社会が成立し、モダンな都市空間などの様々な面において西洋化の本格的な推進がなされている。大正デモクラシーの風潮が起こり、空前な自由の思潮を唱える最中に、鉄格子の精神病院に閉じ込められる第二十三号の存在が鮮明な対照をなしている。このように、第二十三号は産業文明が発達する以前の日本への追悼であり、日本社会の転換点を記録する意図が潜んでいるのではないかと推察できよう。

（41） 芥川、1996.12、p.103

（42） 同上

（43） 〈僕〉の登山ルートの背景に大正期の日本における登山ブームが考えられる。日本では古来登山の風習があったが、近代以前の登山は信仰のためか生業や職務のためかという目的であったのに対し、遊びあるいはスポーツとして山に登ることが近代に入ってからの認知され始めた（山と渓谷社編、p.66）。特に、大正期に入る、「スポーツ的登山」活動は「学生・OBを主役に、大正期半ば過ぎから顕著になる」（同上、p.166）。登山ブームが出現する理由は、大正期の「リベラル」な空気の影響、産業の転換による自然疎外、ガイドブックの大量出版や交通機関の発達と当地受け入れ態勢の拡充にあると言われている。大正期、大町桂月のように、紀行を専らにする作家が登場したことから、登山活動の歓迎度が伺えよう。俳人の河東碧梧桐、歌人の若山牧水や彫刻家の高村光太郎などの文学者以外に、もちろん芥川も数えられる。芥川は1909年の登山経験から「槍ヶ岳紀行」（初出：『改造』、1920.7）を記した。「河童」に登場する河童橋が実在し、上高地から穂高岳に向かうというのも人気の登山コースであった。一方、学校教育の中では登山も取り入れられている。1913年に文部省が制定した『学校体操教授要目』には「遠足登山ノ類」が編入さ

れ、体操科教授時間外で行うべき諸運動の例にされている。1905年の日本山岳会の設立に影響を受け、学生たちの山岳部設立の動きは大正初期に盛んになる。このように、早くも登山が教養手段の一つとして位置づけられていることが分かる（山と渓谷社編、pp.166－185）。

（44） 山と渓谷社編、p.64

（45） 「彼はどうやら知識階級らしい。そして自ら「社会主義者」「物質主義者」を名乗っている。社会主義者についてトックは「百人の凡人の為に甘んじて一人の天才を犠牲にすることも顧みない」（第五章）と言っており、芥川の見方の一端をうかがわせる。だが、主人公は社会主義者といっても別に社会運動にいそしんでいる様子も、理論を主張している様子もみられない。社会主義者という設定は資本家批判を念頭に置き、批判できる立場を持たせるのかもしれないが、あまり活かされていない」（宮坂編、1999、p.122）と論じられていることに対して、筆者は賛成する。「社会主義者」と名乗るのは、むしろ資本家や無名の労働者から、距離を取るためのいい訳であり、テクストにおいては、これ以上の詳細な論述は特にみられない。

（46） 芥川、1996.12、p.168

（47） 嶌田、p.128

（48） 慎改、p.162

（49） 小山、p.130

（50） 芥川、1996.12、p.167

（51） 山と渓谷社編、p.166

参考文献

芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第14巻、岩波書店、1996.12

芥川龍之介、『芥川龍之介全集』第20巻、岩波書店、1997.8

足立直子、「「河童」論――〈信〉と〈狂気〉を境として」、『国文学:解釈と鑑賞』75（2）、至文堂、2010、pp.145-153

小山昌宏、「1920（大正9）年から1930（昭和5）年の大衆社会状況――昭和初期の都市大衆と農村民衆の生活水準について」、『東京外国語大学留学生日本語教育センター論集』（34）、2008、pp.105－121

酒井英行、「「河童」の構造」、『芥川龍之介作品の迷路』、有精堂、2007、pp.255-256

芝田進午編、『芸術的労働の理論』下巻、青木書店、1984

嶌田明子、「「河童」論：もう一つの物語」（初出：『上智大学国文学論集』（29）、pp.55-71）、宮坂覚編『芥川龍之介作品集6』、翰林書房、1999

慎改康之、「疎外された狂気――『狂気の歴史』と人間学」、『年報　地域文化研究』第1

号、1998、pp.161-177

関口安義、「「河童」を読む――龍之介の生存への問いかけ――」、『都留文科大学研究紀要』70、2009、pp.37–58

陳玫君、「芥川龍之介の「河童」にみる「狂気」」、『アジア社会文化研究』11、2010、pp.83–107

ハッチオン、リンダ、『パロディの理論』、辻麻子訳、未来社、1993

羽鳥徹哉・布川純子監修、成蹊大学大学院近代文学研究会編、『現代のバイブル：芥川龍之介「河童」注解』、勉誠出版、2007

フーコー、ミシェル、『狂気の歴史――古典主義時代における』、田村俶訳、新潮社、1975

宮坂覺編、『河童・歯車＝晩年の作品世界』、『芥川龍之介作品論集成』第6巻、翰林書房、1999

山と渓谷社編、『目で見る日本登山史』、山と渓谷社、2005

山本健吉編、『芥川竜之介：文芸読本』、河出書房新社、1962

吉田精一、『吉田精一著作集第二巻　芥川龍之介Ⅱ』、桜楓社、1981

吉田精一、『吉田精一著作集第一巻　芥川龍之介I』、桜楓社、1979

吉本隆明、『吉本隆明全著作集』第4巻、勁草書房、1969

A Study of *Kappa*: From a Perspective of Industrialization and Humanity

XIE Yinping

This study examines the story of "*Kappa*" (1927) by Ryunosuke Akutagawa, a famous writer in Taisho-period. The subject of "*Kappa*" narrates his experience in the kappa world from the perspective of the mad protagonist No.23, thus satirizing the Japanese society at that time with the fictional kappa world. In terms of the related research, it can be divided into the following aspects. Firstly, based on the Japanese society at that time, this paper focuses on the social criticism of "*Kappa*". Secondly, combined with the author's own experiences, it discusses Akutagawa's views on love and religion. Thirdly, it expounds the arrogant significance in the work. Since "*Kappa*" is very popular with modern readers, as opposed to the author's personal level, the significance of this novel for modern society is worth exploring. This paper focuses on the chapter eight which describes the book factory, and from a perspective of industrialization and humanity, how does Akutagawa describe the individual subjects in modern society? What is the enlightenment for modern society? In addition, why does the protagonist go mad? By discussing the above problems, this paper expounds the related problems of human survival revealed in "*Kappa*".

Firstly, this paper discusses the characteristics of "*Kappa*", thus establishing its position in Akutagawa literature. Particularly in the latter part of the discussion, with Hutcheon's theory, it discusses the playful expression techniques, thus making it clear that "*Kappa*" reflects the Japanese society at that time.

Chapter two and chapter three discuss in detail the description of the mechanized representative space book manufacturing factory in chapter eight.

The large equipment in the factory and the rapidly running machines hinted at the rapid development of Japan's industrialization at that time. In particular, the contrast between the factory technicians and machines hints at a social reality that human labor is gradually replaced by machinery. However, the phenomenon that the production of books and other works of art is like the general raw material processing manufacturing industry implies the violence and desires of modern industrialization. At the same time, it also reflects the author's vigilance to the industrial progress which will replace the human imagination and creativity.

The relationship between machines and humans implied in "*Kappa*" is reminiscent of the existence of artificial intelligence in modern society. Machines can replace not only human labor, but also human brains. At the time when the work was published, it was a fantasy, while in modern society, it comes to be a reality. Therefore, to some extent, "*Kappa*" has a prophetic nature towards the modern society.

In chapter four, it discusses the essence of the unemployment problems in the kappa society. In the kappa society, the law stipulated that the unemployed workers should be eaten as food. The fact of the commercialized body, which also exists in Japanese society, not only embodies the violence and cruelty of western culture, but also reflects the fundamental problems that the loss of human subjects will pose a threat to human survival. In addition, the punishment regulations in kappa society also reflect the hypocrisy of western modern rationalism.

Finally, this paper discusses the relationship between the frenzy of the protagonist of "*Kappa*", namely the No.23 and the social industrialization. By analyzing the crazy reasons of the No.23 and his willingness to return to the kappa world, we can witness that the rapidly developing industrialized society can pose a threat to the human survival forms. The frenzy of the No.23 can be attributed to the antagonism between human nature and industrialization, which

is a question to the development of modern society, thus stimulating readers to ponder on the human survival forms under the industrialization development.

The threat to human creativity embodied in the description of book factories, the commoditized body of the unemployed, the hypocrisy of modern rationalism exposed by the penal systems, and the loss of human subjects implied by the frenzy of the No.23 are all fundamental problems about human survival in the industrialized society. In "*Kappa*", Akutagawa's reflections on the modern Japanese society are not only enlightening but also alarming in modern society.